

V テ V における再分析 ー複合動詞との統一的分析に向けての覚え書きー

日 高 俊 夫*

要 旨

「押して開ける」「歩いて疲れる」等の「V テ V」複雑述語の統語構造を議論する。具体的には、V テ V の構造は必ずしも一枚岩でないことを仮説とし、主に、対応する語彙的複合動詞との否定に関する振る舞いを比較することによって、V テ V の中にも再分析 (Hopper & Traugott, 2003) を受け、語彙的複合動詞と同様に全体がひとつの統語ユニットと解釈されることが可能なものがあることを示す。

キーワード：複雑述語、V テ V、語彙的複合動詞、再分析、語彙概念構造、特質構造

1 はじめに

これまで、「走り行く」のような語彙的複合動詞と「走って行く」のような「V テ V」という形の複雑述語は、基本的に異なるものとして論じられ、前者が語彙レベルで形成されるのに対して、後者は統語構造において形成されるとされてきた。一方、近年、V テ V の意味構造や統語構造に関する研究も進んでおり (三原, 2013; Nakatani, 2013; Hayashi & Fujii, 2015)、日高 (2018) は、V テイク/テクルの多義性と統語構造を議論し、テイク・テクルの意味によっ

* ひだか としお、九州国際大学現代ビジネス学部、t-hidaka@cb.kiu.ac.jp

ては再分析 (Hopper & Traugott, 2003) を受け、テイク・テクルがそれぞれ1つの形態素として語彙挿入される可能性があることを示している。このようにV テ V という構造も一枚岩ではないことが明らかにされつつあるが、本稿は、語彙的複合動詞と、主にそれに意味的に対応すると思われる V テ V を比較することで、V テ V の中で再分析を受けている可能性があるものをあぶり出し、どのような場合に再分析がなされやすいのかの傾向を掴むことを目的とする。具体的には、否定の振る舞いによって V テイクおよび V テクルの多義性と再分析の可能性を論じた日高 (2018) の分析を他の V テ V にも広げ、再分析の可能性を探っていく。

検証されるべき仮説は、次の通りである。

(1) a. V テイク・V テクル以外の V テ V の中でも再分析がなされている可能性があるものが存在する。

b. 語彙的複合動詞と同様に解釈可能なもの、つまり語彙的複合動詞における前項動詞（以下、「V1」とする）と後項動詞（以下、「V2」）の意味関係と同様に捉えられる V テ V は再分析がなされやすい。

(1b) の理由としては、(1b) のような意味関係を持っていれば、少なくともテが実質上の意味機能を持っていなくても、テを含まない語彙的複合動詞と同様の解釈が可能であるということが考えられる。以下でその可能性を探っていきたい。

2 語彙的複合動詞の分類と形成過程 (Hidaka 2011)

V テ V の具体的な振る舞いを観察する前に、本節では Hidaka (2011) で提示されている語彙的複合動詞の分類に基づいて、語彙的複合動詞の語形成過程を概観する。

Hidaka (2011) では、語彙的複合動詞（扱うデータは、影山 (2013) における、語彙的複合動詞の中でも「主題関係複合動詞」に相当するものが主である）

の語形成について、2つの動詞の LCS を融合させて形成される過程と、V1 が V2 の特質構造 (Pustejovsky, 1995) の主体役割として合成される過程の2つに大別し、前者を、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure; LCS) のタイプによって、さらに次の2つに細分類している。

(2) a. 同じタイプの LCS 同士を融合させて形成する過程

泣き叫ぶ、恋い慕う、嘆き悲しむ、驚き呆れる、折れ曲がる、垂れ下がる、折り曲げる、覆い隠す、破り捨てる、ちぎり取る、走り回る、動き回る、這い寄る、歩み寄る、滑り降りる

b. 異なるタイプの LCS 同士を融合させて形成する過程

叩き壊す、押し開ける、引き倒す、蹴り開ける、叩き落とす、押し上げる、(ボールを) 打ち上げる、笑い転げる、跳ね回る、暴れ回る

以下、具体的な形成のプロセスを概観する。

2.1 LCS の融合によって形成される語彙的複合動詞

まず、(2a) のタイプの複合の具体的メカニズムは(3)のようになる。

(3) 同じタイプの LCS の融合

a. $ACT(ON)(x, (y)) + ACT(ON)(x, (y)) \rightarrow ACT(ON)(x, (y))$

泣き叫ぶ、恋い慕う、嘆き悲しむ

b. $BECOME(y, \dots) + BECOME(y, \dots) \rightarrow BECOME(y, \dots)$

驚きあきれる、折れ曲がる

c. $MOVE(x, \dots) + MOVE(x, \dots) \rightarrow MOVE(x, \dots)$

揺れ落ちる、垂れ下がる、舞い上がる

d. $CAUSE([ACT(ON)(x, y)], [BECOME(y, \dots)]) +$

$CAUSE([ACT(ON)(x, y)], [BECOME(y, \dots)])$

$\rightarrow CAUSE([ACT(ON)(x, y)], [BECOME(y, \dots)])$

折り曲げる、覆い隠す、破り捨てる、ちぎり取る

- e. CAUSE ([ACT (x)], [MOVE (x, ...)]) + CAUSE ([ACT (x)], [MOVE (x, ...)])
 → CAUSE ([ACT (x)], [MOVE (x, ...)])

走り回る、動き回る、逃げ回る、転げ回る、這い寄る、歩み寄る、
 滑り降りる

この中で、例えば (3d) の「折り曲げる」の形成過程は、(4)のようになる。

- (4) a. 折る：CAUSE ([x ACT ON y], [BECOME (y, *FOLDED*)])
 b. 曲げる：CAUSE ([x ACT ON y], [BECOME (y, *BENT*)])
 c. 折り曲げる：CAUSE ([x ACT ON y], [BECOME (y, *FOLDED* ∧ *BENT*)])

次に、(2b) タイプの複合の具体的メカニズムは②のようになる。

(5) 異なるタイプの LCS の融合

- a. ACT ON (x, y) + CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME (y, ...)])
 → CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME (y, ...)])
 叩き壊す、押し開ける、引き倒す、蹴り開ける
- b. ACT ON (x, y) + CAUSE ([ACT ON (x, y)], [MOVE (y, ...)])
 → CAUSE ([ACT ON (x, y)], [MOVE (y, ...)])
 叩き落とす、押し上げる、(ボールを) 打ち上げる
- c. ACT (x) + CAUSE ([ACT (x)], [MOVE (x, ...)])
 → CAUSE ([ACT (x)], [MOVE (x, ...)])
 笑い転げる、跳ね回る、暴れ回る、言い寄る

具体例として、(21a) の「叩き壊す」は、(6)のように形成される。

- (6) a. 叩く：ACT ON (x, y)
 b. 壊す：CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME (y, *BROKEN*)])
 c. 叩き壊す：CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME (y, *BROKEN*)])

以上、LCS の融合によって形成されるプロセスを概観した。

2.2 特質構造における語彙的複合動詞の形成

「V1 が V2 の特質構造 (Pustejovsky, 1995) の主体役割として合成」されてで

きる語彙的複合動詞には次のようなタイプがある。

(7) a. V1 と V2 の主語が一致するもの

歩き疲れる、飲み疲れる、遊びくたびれる、(*ロープを) 辿り着く、
寝ぼける

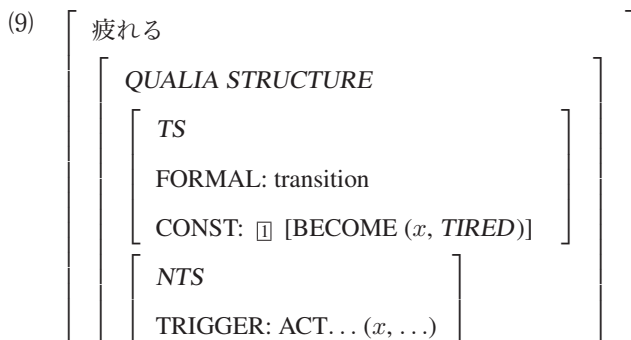
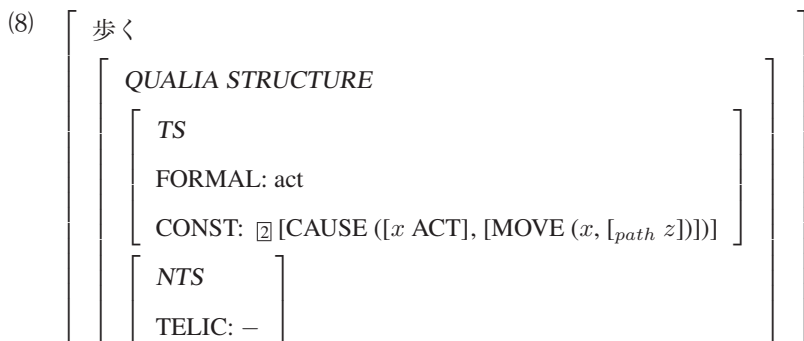
b. V1 と V2 の主語が一致しないもの

着崩れる、煮崩れる、煮溶ける、洗い落ちる、拭き落ちる、(髪が)
切り揃う

c. 由本 (2005) における「語彙的補文構造」に相当するもの

言い落とす、聞き落とす、言い漏らす、聞き漏らす、食べ残す、言
い残す¹

例えば、(7a) の「歩き疲れる」の形成過程は次の通りである。



「疲れる」という動詞は、命題レベル (TS; Truth-conditional Section) では「疲れた状態になる」という、いわゆる状態変化動詞であるが、非命題的な意味レベル (NTS; Non-truth-conditional Section) における、その変化が成立するための前提や慣習的推意などを表す TRIGGER² の値として「活動」(ACT) を含むイベントが指定されている。つまり「疲れる」が成立するためには、事前に何らかの「活動」をしている必要があるということが指定されていることになるが、意図的な移動様態動詞である「歩く」はこの指定に合致するため単一化が可能となり、(10)の「歩き疲れる」が形成される。

$$(10) \left[\begin{array}{l} \text{歩き疲れる} \\ \left[\begin{array}{l} \text{QUALIA STRUCTURE} \\ \left[\begin{array}{l} \text{TS} \\ \text{FORMAL: transition} \\ \text{CONST: } \boxed{1} [\text{BECOME} (x, \text{TIED})] \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{l} \text{NTS} \\ \text{TRIGGER: } \boxed{2} (\text{walk}) \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

以上、Hidaka (2011) における語彙的複合動詞の語形成過程を概観した。以下では、通常、統語的に形成されるとされる V テ V が再分析を受けて解釈される可能性を探っていくのだから、その前に、再分析を裏付ける統語テストとして、新井・日高 (2016) で示したものを紹介する。

3 統語構造

V テイクの統語構造を議論した新井・日高 (2016) では、次のテストをもとに、動詞句の統語派生では文法化によって主要部移動が抑制されるという立場 (Roberts & Roussou, 2003) から、より文法化が進んでいると考えられるアスペクト用法では、イクの主要部移動³ (V-to-Deix Movement) (Nakatani,

2013) が抑制されるとする。そして、意味的に弱化したテとイクが再分析 (reanalysis) (Hopper & Traugott, 2003) を受け、機能範疇 DeixP (Nishigauchi, 2014) の主要部として VP 補部を取ると主張する。つまり、アスペクト用法では再分析によりテイクが1つの形態素として統語派生に導入され、移動用法ではその再分析が随意的に起こっているとする⁴。

- (II) a. V のみの否定: 可能であれば V とイクが互いに独立であり、不可能であればテイクがより形態的に緊密である。

走らないで行った / (?) 走って行かなかった (移動)

*溶けないで行った / 溶けて行かなかった (アスペクト)

- b. 尊敬語化: V のみの尊敬語化が不可能でイクのみの尊敬語化が可能であればイクが本動詞的で V とイクが統語的に互いに独立。V のみの尊敬語化が可能でイクのみの尊敬語化が不可能であればイクが補助動詞的でテイクが VP 補部を取る。

走ってお行きになった / (?) お走りになって行った (移動)

*増やしてお行きになった / お増やしになっていった (アスペクト)

- c. テを跨いだNPIの認可: 可能であれば複雑述語全体が単純な統語構造を持つ (McCawley & Momoi, 1986; Matsumoto, 1996; Nakatani, 2013)。不可能であれば V とイクが独立の統語構造を持つ。

どこも走らないで行った / (?) どこも走って行かなかった (移動)

*全く消えないで行った / 全く消えて行かなかった (アスペクト)

- d. イクの選択的修飾: 不可能であれば単純な統語構造を持つ (McCawley & Momoi, 1986; Matsumoto, 1996; Nakatani, 2013)

走って急いで行った / (?) 急いで走って行った (移動)

次第に消えて行った / *消えて次第に行った (アスペクト)

全体として、移動用法ではイクが本動詞同様移動を表す点で文法化が進んでおらず、イクに対して VP₂ から DeixP への主要部移動が適用される。また、移動用法の一部ではテが意味的に弱化していると考えられ、この場合、イクに

加えてても DeixP の主要部へ移動するとすれば、アスペクトを表す V テイクに近い容認性を示す説明がつく。ゆえに義務的再分析を被るアスペクト用法は (12b)、随意的再分析を被る移動用法は (12a) あるいは (12c) の統語構造を持つとしている。

(12) a. 移動を表す V テイク:

$$\dots \text{Speaker/EF}_i \dots [_{\text{DeixP}} \text{pro}_i [_{\text{Deix}} [_{\text{VP}_2} [_{\text{TP}} \text{V-te}] t_j] ik_j]]$$

b. アスペクトを表す V テイク:

$$\dots \text{Speaker/EF}_i \dots [_{\text{DeixP}} \text{pro}_i [_{\text{Deix}} [_{\text{VP}} \text{V}] te-ik]]$$

c. 中間型 V テイク:

$$\dots \text{Speaker/EF}_i \dots [_{\text{DeixP}} \text{pro}_i [_{\text{Deix}} [_{\text{VP}_2} [_{\text{TP}} \text{V-}t_k] t_j] te_k-ik_j]]$$

日高 (2018) では、着点や経路も含めたより広範囲な V テイクおよび V テクルのデータを考察した結果、より明確な容認性判断を示しており、そのことから、統語構造としては (12c) の構造を想定する必要性が基本的にないことが示唆される。本論においても、統語構造としては (12a)、(12b) の2つの構造を想定する。

また、(11)のテストのうち (11b,d) は、意味的な要因による容認性低下の可能性を否定できないため、以下では、統語構造を探るテストとして (11a,c) を用い、V テ V の統語構造を考察する。

4 対応する複合動詞が存在する V テ V

前節までの内容を踏まえて、本論の主要分析対象である V テ V に関しても分類してみる。本節では複合動詞の形にしても類似の意味を持つと考えられる V テ V を分析対象とする。なお、本稿では (2a) (同じタイプの LCS 同士を融合させて形成する過程) と同様の解釈ができる V テ V を分析対象とするが、その意味的条件に加えて、再分析の可能性をより強くもつものを限定するため

に、音韻的条件として、対応する複合動詞と類似のアクセント構造を持ち得るものを対象とする。

- (13) a. なきさけ「ぶ / なげきかなし「む、
b. ないてさけ「ぶ / なげ「いてかなし「む、

複合動詞である「泣き叫ぶ」「嘆き悲しむ」は語として1つのアクセントを持つ(「」はアクセントの位置である「下り目」を表す)。「泣いて叫ぶ」は「ないて「さけ「ぶ」のように句としての韻律が可能な一方、「ないてさけ「ぶ」のように韻律上は1語であるように振る舞うことができる。本稿では、前者に関しては、一応再分析はないものとみなし⁵、後者のタイプのみを考察の対象とする。

4.1 (2a) (同じタイプの LCS 同士を融合させて形成する過程) と同様の解釈ができるもの

このタイプの V テ V には次のようなものがある。

- (14) 泣いて叫ぶ、折れて曲がる、折って曲げる、覆って隠す、破って捨てる、ちぎって取る、{歩いて/走って} 回る、動いて回る、(ゲレンデを) 滑って降りる

(15) 同じタイプの LCS の融合

- a. ACT (ON) (x, (y)) + ACT (ON) (x, (y))
泣いて叫ぶ、耐えて忍ぶ
- b. BECOME (y, ...) + BECOME (y, ...)
折れて曲がる
- c. MOVE (x, ...) + MOVE (x, ...)
揺れて落ちる、(ボールが) 曲がって落ちる、垂れて落ちる
- d. CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME (y, ...)]) +
CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME (y, ...)])
折って曲げる、覆って隠す、破って捨てる、ちぎって取る、削って

取る、(傘を) 差して立てる、(キリで板を) 刺して通す、切って分ける、書いて写す、

e. CAUSE ([ACT (x)], [MOVE (x, ...)]) + CAUSE ([ACT (x)], [MOVE (x, ...)])

走って回る、動いて回る、逃げて回る、這って寄る、滑って降りる

これらの例に対して (11a) 「V のみの否定」(以降は便宜上「V1 のみの否定」とする) および (11c) 「テを跨いだ NPI の認可」のテストをかけてみる。まず、「V のみの否定」のテストの結果は(16)の通りである。

(16) V1 のみの否定

- a. 泣かないで叫んだ
- b. ?*耐えないで忍んだ
- c. ?折れないで曲がった
- d. 揺れないで落ちた
- e. 垂れないで落ちた
- f. 折らないで曲げた
- g. 覆わないで隠した
- h. 破らないで捨てた
- i. ちぎらないで取った
- j. (廊下を) ?*{歩か/走ら} ないで回った
- k. *動かないで回った
- l. {滑ら/歩か/走ら} ないで降りた

(16)の結果から、全体としては V1 と V2 は統語的にお互いに独立できるということが示唆される。しかしながら「走って回る」「歩いて回る」については、対応する複合動詞「走り回る」「歩き回る」と同様に形態的緊密性が高いと言える。これは、「回る」が本来の意味の「回転する」という意味の意味を失い、移動を強調するような補助動詞として機能しており、独立性が低いためであると考えられる。実際、(17)が示すように、V1 の項が表出可能であるのに対して、V2 である「回る」が本動詞として取れる「場所」を表出することは難しい。

(17) 子どもたちが廊下を走って回った。

cf. 子どもたちが廊下を走った。 / ?*子どもたちが廊下を回った

ちなみに、同じ「歩いて回る」「走って回る」でも「回る」が「複数の場所を訪問する」のような本動詞としての意味を表す場合は、(18)が示すように、「回る」の項である「訪問先」を表出することができ、その場合は V1 のみの否定も可能である。

(18) a. ケンは親戚の家を歩いて回った。

cf. *ケンは親戚の家を歩いた。 / ケンは親戚の家を回った。

b. ケンは親戚の家を歩かないで回った。 (「車等で回った」等の解釈)

したがって、(17)のような補助動詞的な「回る」が用いられた「歩いて回る」は、「歩き回る」と統語的にも同じ構造を持っていることが示唆され、テは統語的に独立している根拠を失っているということになる。対照的に、「訪問」の意味の「回る」では V1 と V2 が統語的に互いに独立しているということになるが、実際「歩き回る」という複合動詞はこの用法を持っておらず、(19)は、「訪問する」の意味を持たず、親戚の家の中 (あるいは敷地) を歩いて回るという意味しかない。

(19) ケンは親戚の家を歩き回った。

(16k) の「動いて回る」の否定である「*動かないで回る」が容認されないのは、統語的に分離が不可能というよりも、意味的な齟齬のためであると考えられる。つまり、「回る」ということは「動く」ということの 1 つの形態であるから、意味解釈上「動かずに回る」ということが成立しないということである。

同じ移動動詞同士の組み合わせでも、「{滑って/歩いて/走って} 降りる」は、「{歩いて/走って} 回る」と異なり、V1 のみの否定が可能であるので、「降りる」が本動詞として解釈され、V1 と V2 が統語的に独立しているということになる。

以上、「V1 のみの否定」について、対応する複合動詞を持ち、同じ LCS のタイプ同士の組み合わせからなる V テ V の振る舞いを観察した。まとめる

と、このタイプは、意味的な要因から上述のテストの容認性が低いものもあるが、基本的に V1 と V2 がお互いに統語的に独立した構造を持つことができると言える。ただし、中には「{歩いて/走って} 回る」のように、V2 が補助動詞として機能している例では形態的緊密性が高くなっているものもあるということになる。

次に「テを跨いだ NPI の認可」のテストをかけると次の結果が得られる。

(20) テを跨いだ NPI の認可

- a. 誰一人泣いて叫ばなかった。
cf. ?* 誰一人泣かないで叫んだ。
- b. 誰一人絶えて忍ばなかった。
cf. * 誰一人絶えないで忍んだ。
- c. その台風で、道路標識は、どれひとつ折れて曲がらなかった。
cf. ? その台風で、道路標識は、どれひとつ折れないで曲がった。
- d. その投手のボールは全く揺れて落ちなかった。
cf. その投手のボールは、全く揺れないで落ちた。
- e. ロウが全く垂れて落ちなかった。
cf. ? ろうが全く垂れないで落ちた。
- f. その男は鉄の棒をどれひとつ折って曲げられなかった。
cf. ? その男は鉄の棒をどれひとつ折らないで曲げた。
- g. 泥棒は宝をどれひとつ覆って隠さなかった。
cf. 泥棒は宝をどれひとつ覆わないで隠した。
- h. ナオミは手紙をどれひとつ破って捨てなかった。
cf. ナオミは手紙をどれひとつ破らないで捨てた。
- i. ナオミは木の実をどれひとつちぎって取らなかった。
cf. ナオミは木の実をどれひとつちぎらないで取った。
- j. ケンは体育館をどこも {走って回らなかった/歩いて回らなかった}。

cf. ?*ケン is 体育館をどこも {走ら/歩か} ないで回った。

k. ケンはその付近をどこも動いて回らなかった。

cf. *ケンはその付近をどこも動かないで回った。

l. ケンはゲレンデをどこも {滑って/歩いて/走って} 降りなかった。

cf. ケンはゲレンデをどこも {滑ら/歩か/走ら} ないで降りた。

基本的に NPI の認可がテを跨いで可能なことから、複雑述語全体が単純な統語構造を持ち得ることを示唆している。つまり、再分析を受け、V テ V 全体 (少なくともテ V の部分) が1つのユニットとして解釈可能であるということであり、上述のような V テ V では再分析が随意的に起こっている可能性があるということになる。ただし、やはり一部の移動動詞については V2 が補助動詞として機能し、形態的緊密性が高くなっていることがうかがわれる。

4.2 (2b) (異なるタイプの LCS 同士を融合させて形成する過程) と同様の解釈ができるもの

(2b) (異なるタイプの LCS 同士を融合させて形成する過程) と同様の解釈ができるものには次のような例がある。

(21) a. ACT ON (x, y) + CAUSE ([ACT ON (x, y)], [BECOME (y, ...)])

叩いて壊す、押して開ける、引いて倒す、蹴って開ける

b. ACT ON (x, y) + CAUSE ([ACT ON (x, y)], [MOVE (y, ...)])

叩いて落とす、押して上げる、蹴って落とす

c. ACT (x) + CAUSE ([ACT (x)], [MOVE (x, ...)])

跳ねて回る、暴れて回る、嗅いで回る、食べて歩く、飲んで歩く、

まず、「V のみの否定」のテストの結果は(16)の通りである。

(22) a. 暴漢はそのテーブルを叩かないで壊した。

b. ケンはドアを押さないで開けた。

c. ケンは棒を引かないで倒した。

d. ケンはドアを蹴らないで開けた。

- e. ケンはハエを叩かないで落とした。
- f. ケンはレバーを押さないで上げた。
- g. ケンはその小石を蹴って落とさなかった。
- h. ?* その子どもは教室を跳ねないで回った。
- i. ?* その生徒達は校舎を暴れないで回った。
- j. ? 彼はその建物を、匂いを嗅がないで回った。
- k. * ケンは町中の蕎麦屋を食べないで歩いた。

cf. ケンは町中の蕎麦屋を食べて歩いた。

(22)の結果から、前節と同様に全体としては V1 と V2 は統語的にお互いに独立できるということが示唆される。また、やはり前節と同様に、V2 が「回る」の場合はテが入っていても実際は複合動詞と同様に解釈されており、語彙的な緊密性が高いことが窺われる。また、「食べて歩く」「飲んで歩く」においても「歩く」は「食べ歩く」「飲み歩く」における「歩く」と同様に、移動容態というよりも単なる移動として解釈され、補助動詞化しているために、やはりテが入っていても語彙的な緊密性が高いことが示唆される。

次に「テを跨いだ NPI の認可」のテストをかけると次の結果が得られる。

- (23) a. 暴漢はドアをどれひとつ叩いて壊さなかった。

cf. ? 暴漢はドアをどれひとつ叩かないで壊した。

- b. ケンは、ドアをどれひとつ押して開けなかった。

cf. ? ケンはドアをどれひとつ押さないで開けた。

- c. ケンは立っている棒をどれひとつ引いて倒さなかった。

cf. ? ケンは立っている棒をどれひとつ引かないで倒した。

- d. ケンはドアをどれひとつ蹴って開けなかった。

cf. ケンはドアをどれひとつ蹴らないで開けた。

- e. ケンはハエを一匹も叩いて落とさなかった。

cf. ?* ケンはハエを一匹も叩かないで落とした。

- f. ケンは荷物を2階からロープでどれひとつ引き上げなかった。

- cf. ?*ケンは何物を2階からロープでどれひとつ引かないで上げた。
- g. ケンは小石をどれひとつ蹴って落とさなかった。
- cf. ?*ケンは小石をどれひとつ蹴らないで落とした。
- h. 子ども達は教室をどこも跳ねて回らなかった。
- cf. *子ども達は教室をどこも跳ねないで回った。
- i. その生徒達は校舎をどこも暴れて回らなかった。
- cf. *その生徒達は校舎をどこも暴れないで回った。
- j. 彼はその広い教室をどこも匂いを嗅いで回らなかった。
- cf. ?*彼はその広い教室をどこも匂いを嗅がないで回った。
- k. ケンはその町の蕎麦屋をまったく食べて歩かなかった。
- cf. *ケンはその町の蕎麦屋をまったく食べないで歩いた。

前節と同様に、基本的に V テ V 全体 (少なくともテ V の部分) が統語的に1つのユニットと解釈可能であると考えられる。

ここまでの内容をまとめると、LCS の融合によって形成される、対応する語彙的複合動詞が存在する V テ V は、随意的に再分析が可能なものが多く、「跳ね回る」「食べ歩く」のような、V2 が本動詞としての容態の意味を失い、単なる移動を表す補助動詞として解釈されるようなものでは再分析が義務的に起こることが示唆される。

4.3 特質構造において形成される語彙的複合動詞と対応する V テ V

(7)で示した、特質構造において形成される語彙的複合動詞と対応する V テ V には次のようなものがある⁶。

(24) a. V1 と V2 の主語が一致するもの

歩いて疲れる、飲んで疲れる、遊んでくたびれる、*寝てぼける

b. V1 と V2 の主語が一致しないもの

?*炒めて焦げる、?*煮て崩れる、?*煮て溶ける、?*洗って落ちる、

?*拭いて落ちる、(髪が) *切って揃う

c. 由本（2005）における「語彙的補文構造」に相当するもの

- *言って落とす、*聞いて落とす、*言って漏らす、*聞いて漏らす、
*食べて残す、*言って残す

まず、「V のみの否定」のテストの結果は(25)の通りである。

- (25) ?歩かないで疲れた、?飲まないで疲れた、?遊ばないでくたびれた、?ロー
プを辿らないで着いた

(25)の多くの例では容認性が落ちるが、これは、V1 が、非命題的な意味レベルで V2 の前提的な原因（特質構造における TRIGGER の値に相当する）とになっているためであると考えられる。つまり、例えば、「疲れる」ためには、通常何らかの活動が前提となるが、V1 が否定されると、その原因の存在自体が否定されるような解釈となるので容認性が落ちるものと考えられる（ただし、その「原因」はあくまで非命題的な意味レベルにあるため、完全に容認不可能になるというわけでもない）。したがって、基本的には統語的に V1 と V2 を分離することは可能であると考えられるので、V1 と V2 がそれぞれ独立した統語構造であるとするのが可能であるという結果であると解釈できそうである。しかしながら、次の「テを跨いだ NPI の認可」のテスト結果は、すべての例が独立した統語構造を持ち得る訳ではないことを示唆するものとなっている。

- (26) a. *ケンはどこも歩いて疲れなかった。

ケンはどこも歩かないで疲れた。

- b. *ケンは何も飲んで疲れなかった。

ケンは何も飲まないで疲れた。

(26a,b) では、「どこも歩かないで疲れた」「何も飲まないで疲れた」が容認可能である。このことは「V テ疲れる」が複合動詞「V 疲れる」とは異なる構造を取ることを示唆している。そもそも、複合動詞の「V 疲れる」は、(27)が示すように経路や対象を取ることができない一方で、「V テ疲れる」はそれが可能であるからである。

(27) a. *ケンはその道を歩き疲れた。cf. ケンはその道を歩いて疲れた。

b. *ケンビールを飲み疲れた。cf. ケンビールを飲んで疲れた。

したがって「V テ疲れる」は「V 疲れる」と異なる構造を持っており、再分析が不可能で、V1 と V2 が統語的に独立していることが示唆される。

4.4 本節のまとめ

本節では、対応する語彙的複合動詞が存在する V テ V の再分析の可能性を検証した。まず、LCS の融合によって形成される、対応する語彙的複合動詞を持つ V テ V は、同じタイプの LCS 融合、異なるタイプの LCS 融合に関わらず、「走り回る」のような一部の移動表現を除いて、基本的に V1 と V2 を統語的に分離できる一方で、テを跨いだ否定要素の認可が可能であることから、再分析も可能であると考えられる。一方、特質構造において形成される語彙的複合動詞と対応する「歩いて疲れる」のような V テ V では、再分析が不可能であることが示唆される。

5 対応する語彙的複合動詞が存在しない V テ V

これまでのところで、対応する語彙的複合動詞が存在する V テ V の多くは再分析が可能であるという結果を得たが、それは、V テ V が V-V 複合動詞として解釈されているためであるかもしれない。そこで、本節では、対応する複合動詞が存在しない V テ V を観察することにより、V テ V そのものが複合動詞的に解釈される可能性を探ってみる。

まず、V1 のみの否定に関する振る舞いを見てみる。

(28) a. ?その財布を、落とさないで失くした。

b. その金属を、熱さないで溶かした。

c. そのシャツを、干さないで乾かした。

d. その本を、読まないで理解した。

- e. その障子を、穴を塞がないで直した。
- f. その道路を、掘り返さないで直した。
- g. 風邪をひいたが薬を飲まないで直した。
- h. その鶏は、野菜を食べないで育った。

この例が示すように、対応する複合動詞が存在しない V テ V は、V1 のみの否定が可能であることから、形態的は V1 と V2 が独立した構造が可能と考えられる。

次に、テを跨いだ NPI の認可についての振る舞いを観察する。

- (29) a. 財布を1つも落として失くさなかった。

*財布を1つも落とさないで失くした。

- b. 金属を1種類も熱して溶かさなかった。

*金属を1種類も熱さないで溶かした。

- c. シャツを一枚も干して乾かさなかった。

?*シャツを一枚も干さないで乾かした。

- d. その本を1ページも読んで理解できなかった。

その本を1ページも読まないで理解できた。

- e. その道路を、どこも掘り返して直さなかった。

その道路を、どこも掘り返さないで直した。

- f. *風邪をひいたが何ひとつ薬を飲んで直さなかった。

風邪をひいたが何ひとつ薬を飲まないで直した。

- g. *その鶏は野菜しか食べて育たなかった。

その鶏は、野菜しか食べないで育った。

(29a,b,c) は再分析が義務的、(29d,e) は再分析が随意的、(29f,g) は再分析が不可能であることを示唆している。つまり、前節までの、対応する語彙的複合動詞が存在する V テ V ほどは再分析の可能性は高くないが、V テ V の形しか許さないものであっても再分析は可能であることがうかがわれる。

この、(29)における容認性の違いの具体的要因を明らかにすることは今後の課

題としたいが、例えば、「財布を落として失くす」において、「落とす」はほぼ「失くす」と同義に解釈される。また、「金属を熱する」や「シャツを干す」の目的は、通常、金属を溶かしたり、シャツを乾かししたりすることである。つまり、これらの例において「V テ V」は一連の典型的行為として「1つのイベント」として処理されるのかもしれない。そのため、これらは NPI と否定辞の一致に関してはあたかも 1 語であるかのように振る舞うのではないだろうか。同様のことは「本を読んで理解する」「道路を掘り返して直す」にも言えるかもしれないが、先の 3 つに比べて典型性が幾分低いので必ずしも「1 語」とはならず、再分析が随意的である振る舞いを示していると考えられそうである。

(29f,g) は再分析が不可能であるという振る舞いを示しているが、これは NPI で示されたものが V1 と V2 の共通の項となっていないためであると考えられる。その証拠に、(29f) に関しては実際に文を作るのが難しいが、(29g) に関しては共通する項に NPI を充てると容認性が改善する。

(30) その鶏しか野菜を食べて育たなかった。

以上をまとめると、たとえ対応する語彙的複合動詞が存在しなくても、V テ V 全体が複合動詞に準ずるような「1つのイベント」として意味処理されれば再分析が可能になり、場合によっては再分析が義務的になることもあるということになる。

6 まとめと今後の課題

本稿では、主に否定の統語テストを用いて V テ V の再分析の可能性について検討した。結果としては、LCS の融合によって形成される語彙的複合動詞に対応する V テ V では基本的に再分析が随意的なものが多く、特に V2 が移動動詞で、移動は表すものの本動詞としての容様態等の意味がなくなって単なる移動と解釈される場合は再分析が義務的になる。

特質構造において形成される語彙的複合動詞に対応する V テ V の「V テ疲

れる」のような例は、対応する複合動詞と異なり V1 の項を表出することができることもあり、形態統語的にも対応する語彙的複合動詞とは異なる構造を取り、V1 と V2 がお互いに独立していると考えられる。

また、対応する複合動詞が存在しない V テ V でも、全体が1つのイベントとして解釈されれば再分析が可能であり、場合によっては義務的に再分析を受けることもある。

以上が本稿のおおまかな内容であるが、依然として課題が残っている。大きな問題として、そもそも本稿で用いた否定のテストがどの程度統語構造を反映したものであるかを再検討する必要があるだろう。Nakatani (2013, 112) が指摘しているように、本論で行った NPI のテストは意味的・語用論的な要因によって容認性が向上する。本論では、Nakatani (2013, 112) で提示されているような、文脈を整えたりといった、容認性を向上させるような文脈環境を作り出してはいないので、一定程度は形態統語的な構造の問題であるとすることは可能であると思われるが、さらに詳細な意味論的考察が必要であろう。その部分が明らかになれば、意味と統語構造の関係について、より精密なモデル構築が可能となるが、それは今後の課題としておきたい。

また、対応する複合動詞を持たない V テ V における再分析の可能性はある程度肯定できたと考えるが、実際、どのような場合にそれが可能であるのかの理論的な記述や説明は不十分である。具体的には、V1 や V2 の特質構造の目的役割や主体役割を用いて理論的に説明できる可能性があると思われるが、詳細は今後の課題としたい。

【注】

- 1 ここでの「言い残す」は「言わずに残しておく」の意味を表すものである。「言って残す」の意味の「言い残す」は (2) の過程によって形成される。
- 2 Hidaka (2011) では Pustejovsky (1995) の特質構造を修正し、彼の「主体役割 (AGENTIVE)」に対応するものとして TRIGGER という名称を用いている。その詳しい経緯や理由については Hidaka (2011) を参照されたい。
- 3 Hayashi and Fujii (2015) は「ピザを作ってもらう」のような構文で主要部移動が発動されることを論じている。本稿では、テイク・テクル構文においても同様の主要部移動がなされるものが一部あることを認めることになる。
- 4 容認性判断における「(?)」は、話者によっては容認性が下がることを示す。
- 5 このことが妥当かどうかは検証しなければならないが、それは今後の課題としたい。
- 6 (24b) は、少なくとも筆者には、対応する複合動詞に比べて容認性が低いように思われるが、これは V1 が継続動詞であり、V2 が変化動詞であることから、テが基本的に「継起」の解釈になると思われるが、実際のイベントは「炒めた後に焦げる」というよりも「炒めながら (それが原因で) 焦げる」ので、テが表す継起の解釈に合わないためであるかもしれない。また、(24c) が不可能なのは、意味的に「言うことを漏らす」のような、V1 が V2 の補部になっているような意味的解釈にテの意味機能が合わないためであると考えられる。このような、複合動詞を V テ V の形にするという操作において、どのような場合に可能になり、どのような場合に不可能になるかの詳細は興味深い問題であり、テの意味機能を考察する上でも重要であると思われるが、別稿に譲り、本稿では 差し当たって容認される V テ V を考察対象とする。

【参考文献】

- 新井文人・日高俊夫 (2016). 「V テイクの再分析に関する統語論的考察」. *KLS*, 36, 1-12.
- 影山太郎 (2013). 「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—」. 影山太郎 (編), 『複合動詞研究の最先端 謎の解明に向けて』, pp. 297-325. ひつじ書房.
- 日高俊夫 (2018). 「V テイク・V テクルの多義性と統語」. 『Theoretical and applied Linguistics at Kobe Shoin: トークス』, 21, 23-40.
- 三原健一 (2013). 「テ形節の統語構造」. 『日本語・日本文化研究』, 23, 1-15.
- 由本陽子 (2005). 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』. ひつじ書房.
- Hayashi, Shintaro. & Fujii, Tomohiro. (2015). String Vacuous Head Movement: The Case of *V-te* in Japanese. *Gengo Kenkyu*, 147, 31-55.
- Hidaka, Toshio. (2011). *Word Formation of Japanese V-V Compounds*. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.
- Hopper, Paul J. & Traugott, Elizabeth Closs. (2003). *Grammaticalization*. Cambridge University Press.

- Matsumoto, Yo. (1996). *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- McCawley, James D.. & Momoi, Katsuhiko. (1986). The Constituent Structure of *-te* Complements. *Papers in Japanese Linguistics*, 11, 1-60.
- Nakatani, Kentaro. (2013). *Predicate Concatination: A Study of the V-te V Predicate in Japanese*. Kuroshio Publishers.
- Nishigauchi, Taisuke. (2014). Reflexive Binding: Awareness and Empathy from a Syntactic Point of View. *Journal of East Asian Linguistics*, 23 (2), 157-206.
- Pustejovsky, James. (1995). *The Generative Lexicon*. MIT Press.
- Roberts, Ian. & Roussou, Anna. (2003). *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.